

第21回ヤンマー学生懸賞作文 銅賞

私の目指す酪農

46期 掘越優里

私は、生まれたときから酪農・乳牛と共に生活していました。両親が毎日牛乳を搾る姿を、小さいときから見てきて、その姿にあこがれていました。そして今は、自分も将来は両親の後を継ぎ酪農をしたいと強く思っています。

私の家は、長崎県島原半島の先端にある、雲仙市国見町で酪農を営んでいます。島原半島は農業が盛んな地域で、長崎県の酪農戸数の約7割、軒数でいうと約130軒あまりが島原半島にあり、長崎県の酪農の粗生産額の約7割を算出するなど、長崎県の酪農を支えています。

私の家は、ホルスタインを飼育しており、搾乳牛約60頭、育成牛約30頭、合計約90頭ほどを飼育している酪農家です。1日1頭あたりの平均乳量は約35キログラムで、1日あたりの総乳量は約2トンに上り、昨年1年間で約630トンもの牛乳を生産しています。

近年の酪農情勢は、原油の高騰化に伴い、家畜用のトウモロコシ生産量が減少しており、配合飼料の価格は昨年の1.5倍にまで膨れ上がっています。その反面、乳価は年々値下がりをしており、ここ数年の酪農経営は非常に厳しい状態にあります。

これだけでも、大変大きな問題ですが、もう1つ問題になっているのが、生乳の消費低迷です。全国の生乳消費量は年々減少しています。ついには、どんどん廃棄処分されていると聞きました。どんなに供給が増えたとしても、消費がこのまま減少し続けると、さらには廃業を余儀なくされる酪農家もでてきます。その証拠として、ここ数年で徐々に全国で廃業される酪農家も少なくありません。酪農家にとって致命傷ともなる問題ばかりが挙がっています。

我が家もこの不況の時代に飲み込まれないようにと試行錯誤していますが、困難を完全に振り切ることは出来ません。

先ほども述べましたが、我が家は、昨年1年間で約630トンの生乳量をだしており、その生乳の乳代は5500万円ほどです。現在その乳代のほとんどが飼料費、光熱費などに差し引かれていくと、純粋な利益はほとんど手元に残りません。

このような厳しい状況の中で、どのようにして今を切り抜けられるかは、酪農後継を目指す自分の手にかかっていると思います。しかし、家族3人で経営

していくには今の規模で限界がきています。これ以上、乳牛の頭数を増やし、経営規模を大きくするととなると逆に経費がかさみ、厳しくなります。だからといって、このままの状況では何も変わりません。

このように酪農家にとって明るい兆しを見ることはありません。しかし、課題は多いですが、酪農の魅力や面白さはいっぱいあります。日本の食糧自給率は40パーセントと低い水準ですが、日本の生乳生産量は自給率100パーセントでみなさんが飲んでいる牛乳は純粋な日本産です。つまり、酪農は日本の食糧を生産しているという、なくてはならない産業なのです。また、他の仕事では味わえない感動を味わうこともできます。例えば、生命の誕生を目の前で見ることが出来、自分が世話してきた乳牛たちが妊娠をし、出産することで乳牛の成長を肌で感じることができ、やりがいがあります。

私は、ジャージーやホルスタインなど酪農が盛んな岡山県の蒜山にある中国酪農大学校に入学し、酪農経営や乳牛のこと、飼育管理について勉強しています。この間に感じたこととして、将来私が目指す酪農についてやってみたいことがあります。

1つ目は、「乳牛づくり」です。牛乳を生産するにはまず、牛乳の生産者である牛づくりが大切になります。年齢や産次を重ねても、体形が崩れずに乳質の良い生乳を多く出す乳牛づくりを目指していきたくて考えています。そのためには、乳牛の改良はもちろんのこと、体型審査の受審や乳牛共進会などに出場していい乳牛を見て、それを生かしながら自分で育てて勉強し、経営が豊かになるようにしていきたいと思えます。

高校時代、農業祭にてB&Wショーが行われていました。1, 2年生のときは学校の牛を引いて出場していましたが、どうしても最後の年は自家産の牛を引いて出場したくて、両親に無理をいって3部と4部の牛を引くことができました。3位以内に入賞することは出来ませんでした。初めて自分一人で調教し牛を洗い、毛刈りをしてみて全てが終わった時に達成感を覚えました。もっともっと自分の手がかっこよくしたい美しい牛をつくり上げたいと思えました。その昔、私の祖父は牛づくりの名人と言われ、長崎県の改良同士の会を創設した第一人者であり初代会長をも務めました。祖父は県内の共進会はもとより九州大会でも上位入賞、全国大会に出場するなど、数十年乳牛の改良に努めてきました。私はそんな祖父を心から尊敬し自分もいつか祖父のようになりたいと思っています。祖父に負けないような牛づくりを目指します。

2つ目は、牛にストレスを与えず、安全でおいしい牛乳を提供したいと考えています。そのためには、まず飼育環境を整えることが重要であると思えます。我が家の牛舎は、もともとは「つなぎ牛舎」でしたが、頭数が増えてきたこともあり5年前「フリーストール牛舎」に、変わりました。「つなぎ牛舎」はまだ

のこっており、哺育や1年未満の育成牛を飼育しています。「フリーストール牛舎」は、牛がストレスを受けることなく、のびのびと自由に歩くことができ自分の好きなときに運動したり、食事をしたり、休むことができます。しかし、現在の牛舎の問題点としては、頭数の割には、飼育スペースが狭く、自由に歩いているように見えても、所々窮屈にして横（横臥）になっている牛を見ることがあります。この環境を変えて、飼育スペースを広くしてみるか、もしくは、長崎県ではあまり行われていない「放牧」にもチャレンジしてみて、乳牛がストレスを感じなくて、のびのびと暮らしていけるような飼育環境を作っていきたいと考えています。

私は、生まれたときから、両親のもと、乳牛と共に生活をし、多くの乳牛たちと出会い別れ、そして乳牛からさまざまな感動をもらいながらここまで来ることが出来ました。正直、私は高校卒業の際、進学しようか即自営しようか迷いました。ですが、両親や周りの方にもっと世間を見て勉強しておいでと言われて決心がつけました。私も、本当はもっともっといろんな知識や技術を身につけてから後を継ぎたいと考えていたので嬉しい言葉でした。酪農情勢が不安定な今、自分が持っている知識や技術をいま以上に大学で詳しく学び、最先端の酪農経営の習得、牛の飼育技術、またおいしい牛乳づくり・美しい乳牛づくりについてたくさんを学んでいき、将来の我が家の酪農経営に生かしていきたいと考えています。いつしか私が掘越牧場の黒柱となり、家族を支えていきたいと思えます。

私の目指す酪農・・・。私がいたい場所・・・。私のいるべき場所は酪農の世界にあるとそう信じています。私は、これからも乳牛と共に歩いていきます。